

入選

たくさんのありがとう

埼玉県 大谷場中学校

二年 野口 結衣

昨年、私は中学生になり、料理部に入部した。料理部は、調理実習をすることが主な活動内容であったが、コロナ禍の影響で調理実習自体できない日が続いた。そこで、なにかできることはないか、ミーティングが開かれた。

その当時、日本国内でマスク不足が深刻となっていたことから、「布マスクを製作し、近隣にある老人福祉施設に寄付してはどうか？」と、手芸分野の活動に方向転換がされ、不慣れながら、毎日部活の時間を利用して、布マスクを製作した。

近隣の老人福祉施設に、布マスクの提供について聞いてみたところ、ある施設が快く依頼を受けてくれた。さっそく、日にちを調整し、部員みんなで布マスクを届けに行った。しかし、コロナウイルス感染のリスクがあったため、直接手渡すことはできなかった。施設職員の方に、配布していただくようお願いすることだけして帰った。

数日後、布マスク提供のお礼が学校に届いた。そのお礼の中には、楽しそうに布マスクを選んでいる写真が添えられていた。初めて見ず知らずの人の役に立てたことに対して、とても嬉しかったことを覚えている。

施設職員の方に、ほかに今必要なものがないか、聞いてみたところ、次のような答えが返ってきた。

「布マスクがまだ全員分ないこと、そして日頃から雑巾ぞうきんが不足していて困っている」という内容であった。

さっそく、できることから取りかかったが、一つ問題が起きた。マスクの材料はあったが、大量の雑巾を作る布が不足していた。そこで考えついたのは、全校生徒に雑巾を作るための布を提供してもらうことであった。そして、提供してもらった人には、そのお礼として、料理部員が作ったクッキーをお返しにプレゼントすることにした。

最初は布が集まるか心配だったが、お返しのクッキープレゼントのおかげもあって、生徒のみならず先生からも布が大量に集まった。

今まで、かなりの布マスクを作っていたので、今度は手際よく布マスクを製作できた。また、みんなから提供してもらった布で、雑巾も手早く仕上げた。そして、再び施設に届けた。

次は、雑巾の布を提供してくれた方たちへのお礼を作る番だ。やっと、これから自分たちの腕の見せどころだと思った。料理部として、料理ができる嬉しさをかみしめながらクッキーを作り、ラッピングをして、布の提供者全員に配布した。

「布を提供してくれてありがとう」と、「クッキーのお返しありがとう」が重なって、とても幸せな気持ちになれた。

コロナ禍で、暗いできごとの多い世の中だが、私にとって貴重な経験ができて、ひとまわり成長できたような気がした。